

回 想

社団法人日本溶接協会
名誉会長 藤田 謙

日本溶接協会創立 60 周年誠に喜ばしく、心から慶賀の意を表したく思います。この 60 周年記念誌に回想を書くようにとのことなので、私が協会に初めて深い係りを持った 1957 年から現在（2009 年）までの 50 数年間のもろもろの出来事の中から三題断ではありませんが、私にとって印象的な次の三つに絞って憶い出を綴ってみたいと思います。

先ず (1) は溶接技術検定委員会十年計画、(2) は塑性設計研究委員会、そして (3) は国際溶接学会 (IIW) です。回想と言えば所詮個人に纏わる憶い出を書くことになるので、自画自賛となり、また多少は一方的な物の見方になることを御寛恕頂ければ誠に幸に存じます。

(1) 溶接技術検定委員会十年計画

私が 2 年余の米国滞在から帰国した翌年 1957（昭和 32）年春に、当時の検定委員長であられた福田烈先生から、「検定を一寸手伝って欲しい」とお声が掛かったのが検定委員会との御縁の始まりで今日に至っているわけです。御存知の方も多少(?)は居られることと思いますが、福田先生は元海軍技術中将で日本の軍艦への溶接の適用に尽力された溶接界の大先達のお一人ですが、厳しい肩書きに反して何時もニコニコと温顔で、かつ極めて清廉潔白な人格者でいらっしゃいました。ところが一方所謂酒豪で、いくら飲んでも悠揚せまらず、造船所に行かされると、造船所側は何人かを指名して交替で酒席のお相手をするには有名な話でありました。私は、福田先生にはその後、1967（昭和 42）年に亡くなる前日に千葉、黒砂の御宅にお見舞に上ってお会いした最後の時まで、長い間物心両面に亘って御薫陶、御指導を頂き、誠に幸であったと思っております。それも一つには、私は小さい時から「大きくなったら軍艦を作るんだ」と言っていたようで、今から思うと当時の日本では軍艦が最も成熟した先端の乗物であったからで、今ならさしずめ「F-1」と言うところでしたでしょうか、その意味で海軍技術中将は子供のころからの憧れの人であったからです。

当時検定は、まさにその揺籃期で昭和 30 年に合格者がやっと 1,000 人を超え、32 年には 3,000 人を超えたところでしたが、現在は 10 万人に達することを考えると隔世の感があります。それ以後次第に検定事業に慣れ事業の重要性を知ることにつれ、また TWI、IS など外国の溶接関連協会の実情と実力を知ることにつれ、溶接協会もせめて借りものでない自前の事務所と検定場を持ち権威ある検定事業を行なうことが是非必要であると感じ、当時の検定本部幹事であった故小宮山賢郎氏と 2 人で計画立案したのが、検定場整備 10 年計画、所謂「10 年計画」で全国の各地区に検定場と事務所を設置する計画でした。大変遅れましたが、多くの方々の御尽力と御協力を得て 20 年余りで曲がりなりにも漸く完成することが出来たのは御存知の通りです。昭和 56 年 3 月その第 1 号として川崎に「中央検定場」を開場した日のことは、臨席された木原先生の笑顔とともに今でも

私の脳裏に深く焼きついています。

尚、日本のこのような形態の検定組織は他の国には仲々真似ることの出来ない日本固有の優れた組織であると思うので、是非将来に亘って大切に維持して行って欲しいと思っています。

(2) 塑性設計研究委員会 (1959年～1998年)

現在の会員の中には、この委員会の名前さえ御存知の方が多いのではないかと思います。日本溶接協会に置かれた研究委員会の中で最も異質で異質な委員会であったと思います。この委員会は私の米国から帰国(1956年)した当時米国で提唱され実用化が考えられていた塑性設計(広義には、材料の塑性を考慮に入れた最終強度設計)の概念を日本に導入しようとしたときに、当時日本の構造設計は従来の許容応力度設計(所謂弾性設計)全盛の時代でしたので、世の中に仲々受け入れられない情勢にありました。それを御覧になった木原先生の御指導で溶接協会の中にこの委員会が設置され、その後約40年間に亘って「塑性強度」の概念を広く構造設計の分野に浸透させることに貢献したわけです。現在建築関係では、塑性設計の考え方がその規則の一部に採用されていること、また現在塑性強度を考慮しない構造設計はあり得ないことなどを考えると、構造設計全体に与えた影響は大きなものがあつたと些か自負しています。

今になって、この委員会の名前を見る度に、歴史の流れの一断面を見る思いがするのは私だけでしょうか。

(3) 国際溶接学会 (International Institute of Welding, IIW)

私とIIWとの出会いは1960(昭和35)年ベルギーのリエージュで開催されたIIWの総会で行われたColloquiumに論文を提出した時からで、当時はまだ日本からの参加者も19人程でした。皆さんは、溶接残留応力が柱の圧縮強度に影響を与えることはよく御存知のことと思いますが、それが公式に認められたのがこのColloquiumであったことを御存知の方は少ないと思います。当時、日本にも残留応力は柱の強度には影響しない等とおっしゃる方々が居られましたから。

IIWに初めて参加したこの時から現在まで約50年間に最も印象に残っているのは勿論IIWの17代会長(1996年～1999年)に選ばれ勤めることが出来たことです。それ迄の16代会長は理事会で主として欧州内から地理的分布等も考慮して順送りに話し合いで決定されてきたものが、1990年代に入ってIIWの経営難の問題もあり、時代の流れ、近代化の流れもうけてIIWの組織の近代化が計られ、先ず(1) official languageが従来の仏、英2ヶ国語から英語のみとなり、次に(2) 会長選挙は、会員各国からの推薦に基づき理事会で承認された複数の候補者について当事国を除く理事全員の無記名投票により決定されることになり、同時に(3) 会長候補者の資格に関しても以下のように文章化されました。

- (i) 候補者はIIWに永年に亘る貢献があること。
- (ii) 候補者の自国の然る可き組織のsupportがあること。
- (iii) 候補者として相応しい資質と英会話能力があること。

以上の経過を経て、1995年1月のパリでの理事会で小生は(もう時効でしょうから書きますが、中国他からの推薦により)3名の候補者の一人として選ば

れ、(日本からは誰も推薦しなかった)小生を除く全理事による投票の結果、President Elect に選ばれたのでした。そして前会長から過去 50 年間東洋からの会長は初めてだし是非受けるようにとの要請があったので、先ず小生の英会話力で OK かを直し、まあ OK だろうとのことだったので、それでは帰国して相談の上回答することとしました。帰国して、協会の理事会に諮ったところ support はするから、大変だろうが受けるべきだということになって受諾の回答をしました。

在任中、種々沢山の憶い出はありますが、特に晴れがましく心に残っているのは、嘗って若かりし頃滞在した米国での 1997 年 IIW サンフランシスコ総会で 600 人を超える参加者の前で挨拶し、floor からの確かな手応えと拍手を感じたときで、万感胸に迫って、その嬉しさは格別なものでありました。

お蔭様で計 7 年の任期 (President Elect 1 年, President 3 年, Past President 3 年) を無事卒業出来、日本の国際活動の一助にもなり、またこのような外国の組織の運営に関する実情を具に体験出来たことは大変に有意義なことでした。また当時 20 以上設けられていた commissions に日本人の委員長が一人もいなかったのも、高額の年会費も払っているのだし日本の溶接の高い技術力を考えても私の任期中に少なくとも 3 人以上の委員長は作るとの公約も果たすことが出来たことなど一応の成果を挙げる事が出来ました。これらは、勿論、一重に多くの方々の種々の面での御支援と御指導の賜でありまして、御関係のすべての皆様に心から御礼を申し上げる次第です。

折角の機会ですからもう一言。

私が今迄に衝撃を受けた著書の一つにもう 10 年以上前になりますが、ハンチントン教授 (ハーバード大学) の「文明の衝突」があります。憶えておられる方も多いと思いますが、21 世紀には世界で文明間の衝突が起る」(例えば、キリスト教とイスラム教) という予測でありました。この中でハンチントン教授はその後の著書の中でも度々日本の文明について触れ、次のように述べておられます。

「日本の文明は、文明的 ideality が極めて明白で、他のアジア文明とは異質で、それ自体独立した西欧、イスラム、中華などと並立する文明である」としています。

文明は固有の文化を持っているので上記の文明を文化と置き換えると日本の文化はアジアにおいてもそれ自体独立した優れた文化であると言えます。この意味で私は日本の溶接・接合技術を将来に亘って日本固有の文化の領域にまで高めたいと願うもので、そのためには固有の文化に基づいた創造的な独特の技術とその適用について自信を持って研究開発してゆくことが望まれるのではないのでしょうか。

最後になりましたが、宮田会長のもと、私の永年の夢と願望でもあった「溶接会館」も新築されることになって、溶接協会が今後ますます隆盛に発展されることを心から期待し、祈念しております。また、私の永い協会並びに IIW の会長の期間に亘って真摯に support して頂いた専務理事はじめ職員の皆様方、秘書役として種々御世話頂いた伊東明子さんに心からの謝意を表して筆を擱きます。